とらうべ

助産婦よ，沈黙をしないで

三宅医院院長（岡山）三宅　馨

平成となり，初めてのお正月，助産婦の皆さまはいかがお過ごしですか。

世紀末もあと10年。今，世間では「女性の時代」と銘打って，ソフトな感覚を喜んでいます。その，スポットを浴びている女性の人生の中で，最も女性性が開花される出産に立ち合うことができる仕事を担っていることは，本当に有ることが難しい，有難い縁だと思います。

ましてや，助産婦本来の姿である，地域に密着し女性の一生にかかわって心を支えていく役目ということを考えると，これほど崇高な職業はないでしょう。

したがって，世紀末は頽廃だとして努力することを断念したりせず，新世紀を迎える希望に満ちた10年の準備期間，おおいに感性を磨いてください。そこで1990年を“助産婦元年”と提唱します。

助産婦のあなたは，幸福ですかと聞かれた場合，いつもニコニコ笑顔で何不自由なく生活することを想像するかも知れませんね。

しかし，私の言いたいことは，人間の感性である喜怒愛楽ならびに悲哀すべてを経験できる人生ですかということです。また，あなたのその人生はあなたの意志の選択の上に成り立っていることが大切なのです。それが，幸福な人生を生きていることであり，他人の生き方，状態をも包容する人間性を作り上げるのだと思います。

そして，人間対人間としての信頼関係の上に指導なり助言の専門の業務が実施していかれるのです。他人に関わり，他人の本質に近づきたいと願うのであれば，最低限自分の人生は幸福であってほしいと思います。

昨年10月の日本母性衛生学会の学術集会で，「助産婦外来」に関するシンポジウムがありました。関心をひいたのは，助産婦に対する世間一般の認識不足です。

特に戦後，医療機関で勤務するようになった助産婦は，看護職という専門分野に統括され，同一のユニフォームを着ました。ユニフォームが一緒になると，皆仲間のような気がしてきます。ここに大きな落とし穴。仲間意識の強い日本人は，他人が違ったことをするのは受容できず，したがって助産婦も看護婦も同じような待遇，同じような業務内容をするようになったのかもしれません。（ユニフォームは同じでも，中身まで一緒になれとは言われなかったのに）

そして，世の中の人々が，みんなそれぞれの生き方を追究し，様々な個性を尊重するようになった現代において，これからの時代を担う女性とかかわる助産婦が，いつまでたっても職業アイデンティティを確立できずにいるのは問題です。助産婦を取り囲む組織自体にも原因はあると思いますが，組織を動かすぐらいの情熱を持って助産婦業務に取り組めば，助産婦の存在が希薄だなどと，誰にも言われないはずです。

今一度，まわりを見まわしてください。世の中は確実に変化しています。期待される助産婦として，女性たちの最先端に踊り出ていただきたいと思います。

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/14 10:02:27